

空間を食べ比べるように

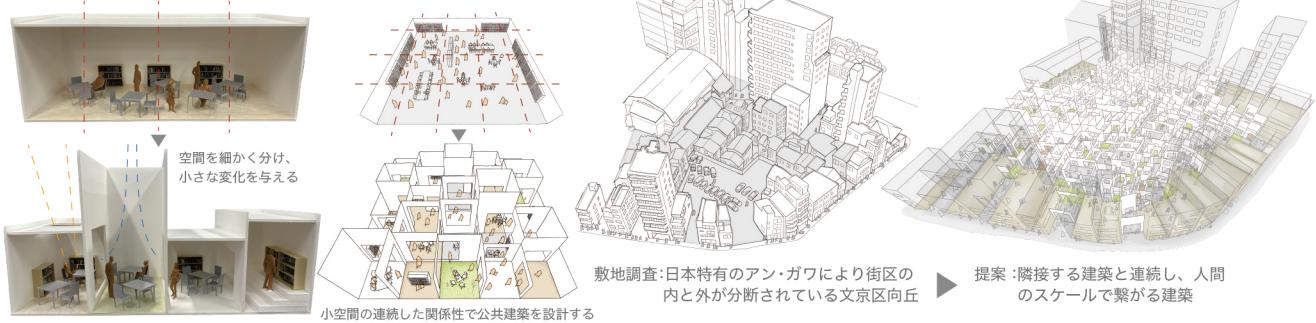
ー小さな変化の連続が街をやわらかく繋げるー

東海大学 工学部建築学科
佐々木 大樹



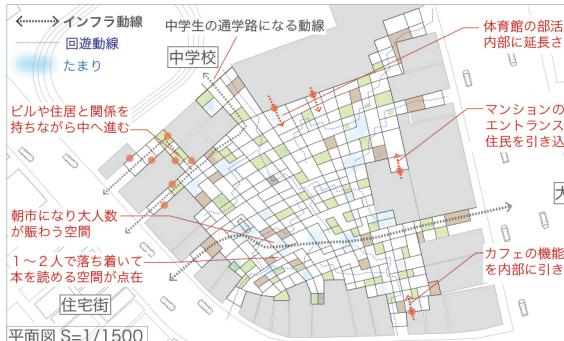
小空間の連続した関係で街区の内と外をやわらかく繋げる建築
大人数の活動と少人数の活動を混在させることで新しい関係を作れる
開口の重なりで視線が抜け、奥まで空間が繋がる

■ 空間の食べ比べ=微細な環境の違いから生まれる活動の変化



敷地調査:日本特有のアン・ガワにより街区の内と外が分断されている文京区向丘

提案:隣接する建築と連絡し、人間のスケールで繋がる建築



活動の連続が人々の新たな関係を作る



設計主旨 concept

細かく空間を分けることによって生まれる繊細な豊かさを新たな公共空間の形として提案する。「空間の食べ比べ」とは、一つの機能の中で空間を細分し、環境に小さな変化を与えることで居場所によって微妙に異なる活動の変化を起こすこと、と定義した。例えば、通常のホールではどの席に座っても殆ど同じ行為・活動だが、本提案では床の仕上げや天井高を変えたり、部分的に屋外や植栽になっている環境を作ることで同じ機能の中でもいる場所によって行為や活動が変わる空間を作った。計画敷地として、東京大学や中学校と隣接しているのに関係が弱く、日本特有のアン・ガワによって街区の内と外が分断されている文京区の向丘を選定した。敷地の形状や建物の輪郭を元に人々が通り抜けたり溜まる空間のグリッドを設計し、体育館やカフェなど、ガワの建物のスケールと活動を内部に連続させつつ、徐々に変化させることで街の裏と表の活動をやわらかく繋げる。空間を細かく分けることで活動が少しづつ変化し、均一ではない多様な使い方が共存するようになる。小さな変化の豊かさを楽しむと共に、活動の連続が人々の新たな関係を作り、内外で分断されていた街区は個別ではなく一体化した活動を広げていく。